

FUEKI

vol.67



学校でひらく
舞台芸術教室





表会」の閉会式において、このように締めくくった。
 7月11日、会場となった小串小学校の体育館は、朝から30度を超える暑さに包まれていた。5日から7日にかけて西日本地方を襲った未曾有の豪雨は、岡山県下各地にも甚大な被災の爪痕を残し、一時は発表会の開催も危ぶまれるほどであった。そうしたなか体育館には、両校の全校生徒や教職員のほか各校の保護者や地域住民も大勢来場していたが、どこか嵐のあとの疲労感のような気分が場内を覆っていた。

特定非営利活動法人アートフォーム
 代表理事 大森 誠一
 雨ニモマケズ合同交流発表会
 「みんな良かった！一人ひとりが自分の役割をしっかりと自覚して全力で頑張った。どの作品もみんなで作って創りあげることができた。だから、一人ひとりの頑張りが大きな力になった」。岡山市立朝日小学校の岸本伸一校長は、同立小串小学校で開催された「学校でひらく舞台芸術教室・合同交流発表会」について、こう話している。



学校でひらく
 舞台芸術教室
 ー小規模小学校で続いた8年間



た。それだけに岸本校長の力強い言葉は、子どもたちばかりでなく、来場した全ての方々への励ましのエールとなって伝わった。
 合同交流発表会は、朝日小学校47人と小串小学校27人の全生徒が、5月から各校ごとに継続してきた創造体験授業の成果を披露し合う催しであった。朝日小学校には鳥取市鹿野町を拠点に国内外で活躍する鳥の劇場に演劇創作を依頼。同劇場の芸術監督であり演出家の中島諒人さんは2

年・3年・4年生と『ペンギンたんていだん』を題材に、俳優の齊藤頼陽さんは5年・6年生と『ドラゴンボール神龍登場！』に挑み、俳優の村上里美さんは1年生と『朝日小版ももたろう』に取り組んだ。一方、小串小学校には岡山と京都を拠点に活動する舞踊家の平井優子さんを派遣し、絵本『かいじゅうたちのいるところ』を題材に全員でダンス作品を創作した。
 岸本校長は挨拶のなかで「講師のみなさまには、子どもたちのその時々様子や成長を適格に把握され、随時子どもたちに課題を投げかけ考えさせてくださいました。だからこそ、子どもたちは自分のこととして生き生きと活動ができました。ほんとうによい経験になりました」と総括した。



学校や地域の課題に向き合いながら

学校でひらく舞台芸術教室の始まりは2011年5月。公益財団法人福武教育文化振興財団の創立25周年記念事業として出発した。同財団の「教育と文化による人づくり、地域づくり」というミッションに、NPO法人アートファームが協働するパートナーとして参画。岡山市内の小規模小学校に演劇やダンスのアーティストを派遣する事業を展開してきた。近年、学校教育の現場にアーティストを派遣する事業は、文科省をはじめ全国の自治体や公的セクターが取り組んでいるが、学校でひらく舞台芸術教室では、あえて小規模小学校を対象とし、毎年2校とともに一学期に5回の90分間授業を2〜3年間の複数年継続で行ってきた。

複式学級を執る小規模小学校では、子どもたちの芸術体験の機会が少なく、地域の過疎化というハンディキャップも



までになった。鳥の劇場の中島諒人さんは「驚きました。成長上での変化なのか、3年間の授業を通じて培われた変化なのか、とてもポジティブな影響をみんなに与えてくれました」と評価。中島さんたちは毎回の授業前に子どもたちと一緒に給食をとるなど、子どもたちの視線で、子どもたちと真摯に向き合う姿勢が成果となって表われた。

一方「結果を求めない」ことについては、教師と講師のあいだで認識の違いや戸惑いもあった。前述の朝日小学校でのヒアリング調査でも、教師から「子どもたちがゼロから創る創作劇は大変だった」発表会では完成させた作品を観せたいというジレンマがあった、という苦心談が聞かれた。そして、今年度の3年目には、作品づくりやグループワークについて事前の打ち合わせを行って、教師と講師の共通認識を明ら

余儀なくされている。こうした学校や地域におけるさまざまな社会課題に対して、演劇やダンスのアーティストは、子どもたちに平素の授業では得られない気づきや驚きや喜びを示してくれた。本事業では3カ年継続校として取り組んだ朝日小学校にヒアリング調査を実施し、子どもたちから興味深い回答をいただいた。

指導しない、結果を求めない

学校でひらく舞台芸術教室では、子どもたちに「指導しない」「結果を求めない」ことが、講師を務めてくれたアーティストの共通したスタンスのようであった。子どもたちとのコミュニケーションスキルを備えたアーティストは、「指導しない」関係性の中から、子どもたちに考える・感じる・工夫する・想像する・話し合う・助け合うチカラを引き出していた。アーティストは子どもたちからの応えを受けとめ、次のステップを示していく。時には言葉でヒントを出したり、時には身体でイメージを導いていった。

朝日小学校の3カ年継続授業では、子どもたちの変化や成長を象徴するような成果があった。1年目の授業ではアーティストとの集団創作に全入り込めなかった児童が、3年目には発表会で長いセリフを朗読する配役を演じるかにして取り組んだ。「先生からの理解やサポートがとても重要でした。この授業を成功させたのは先生たちの変化かもしれませんね」中島さんは実感を含めて語った。

岡山大学法学部法学科1年

河原 菜摘

私は、大学の授業の一環で「学校でひらく舞台芸術教室」を取材した。感想を一言で表すと「圧倒された」に尽きる。堂々と役を演じる姿や1年生の声の大きさに驚いた。発表に向けて講師と話し合いを重ねたり、「楽しかった」では終わらず「もっと練習すれば120%が出せた」と上をめざしていたりと、子どもたちの熱意と自己表現に対するしつかりとした考えは、大学生の私にとっても学ぶ点が多かった。発表会のあと「次は合奏をしたい」「ソロパートが欲しい」といった声を聞いた。それは1つの作品を作り上げた自信によるものなのだろう。大人に近づくにつれて、現実性を重視してしまっている私にとって「これをやってみたい！」と語る姿はとても輝いて見えた。もっと柔軟に考え、いろんなことに挑戦しよう、子どもたちから学んだ貴重な視察となりました。



アートファーム

1992年創立。地域と舞台芸術をつなぐ創造・育成・鑑賞・普及事業のほか自治体や公益財団との協働事業に取り組む。第2回岡山芸術文化賞準グランプリ(2001年)・第3回福武文化奨励賞(2002年)・第41回岡山市文化奨励賞芸術部門(2014年)を受賞。

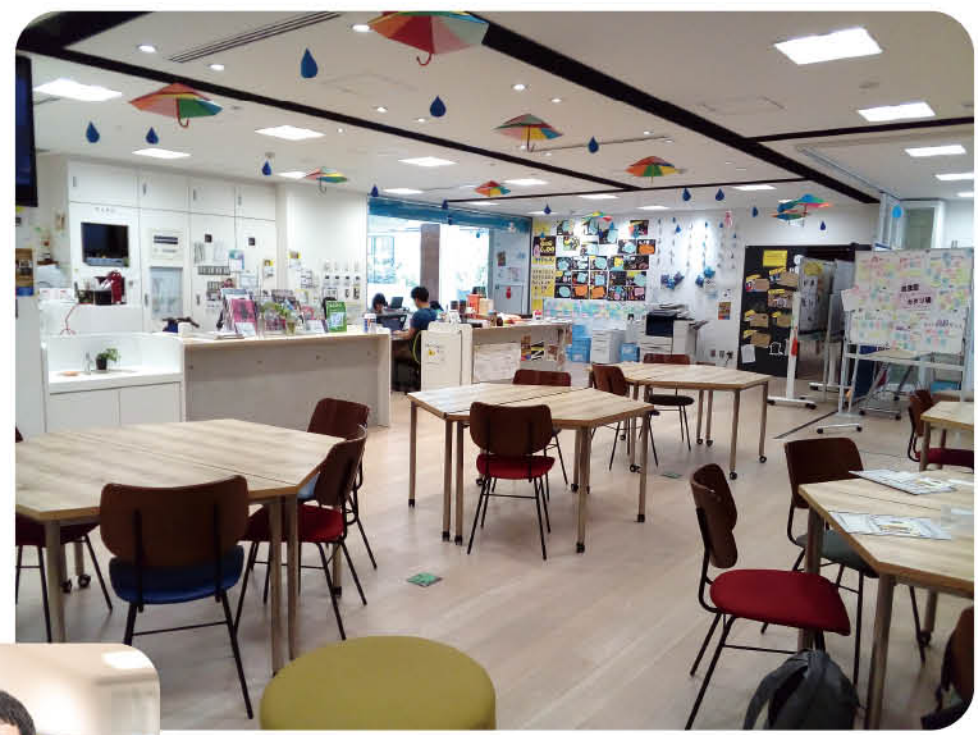
<http://www.artfarm.or.jp/>

中高生によりそいながら

「ナナメの関係」※と「本音の対話」を軸に、子どもたちが主体的に人生を切り拓く学びを届ける認定NPO法人カタリバ。東京都で展開している中高生の居場所「b-lab(ビーラボ)」と「マイプロジェクト」を視察してきました。(財団・野村)

◆「生き抜く力を、子ども・若者へ」を理念に活動する認定NPO法人カタリバ

文京区からPOPOの管理を委託されている認定NPO法人カタリバは、2001年設立、高校生の心に灯をともし授業である「カタリ場」を提供、2006年にNPO法人化した。2011年の東日本大震災をきっかけに被災地での放課後学校「コロポ・スクール」を設立、2013年にはプロジェクト型学習「マイプロジェクト」事業を開始した。2015年に東京都文京区にPOPOを受託、また過疎化が進み人口減少が止まらない地域での教育から地域の魅力・活性化を目指す「おんせんキャンパス」を島根県雲南市でスタートさせる。2016年には東北の経験を活かし熊本で「コロポ・スクール」を開校、また東京都足立区に、困難な家庭環境の中で育つ中学生を対象として居場所事業「アダチベース」の運営を開始。また、2018年7月に発生した西日本豪雨では被害の激しかった倉敷市真備町を中心に被災地の中高生に対する支援のため動き始めている。



◆「ナナメの関係」で伴走する中高生の秘密基地b-lab



白田好彦さん

東京大学本郷キャンパスからほど近い住宅街の中にある東京都文京区教育センターは、区の子どもの学習支援、発達や教育に関する相談、訓練などを実施する施設です。センターの1階、正面玄関から入ってすぐのところに黄色をベースに色とりどりの手書きポスターなどの掲示物が目立つオープンな場所に中高生の秘密基地POPOがあります。POPOにはリビングのようなスペースや、勉強、バンド、ダンス、料理ができるスペース、バスケットボールができる広めのプレイヤードを備えています。POPOは文京区の施設であるので、利用できるのは文京区在住か、文京区内の学校に通う中学生・高校生のみですが、登録すればすべての施設を無料で使うことができます。文京区教育センターの施設のうち、POPOのみ、カタリバが管理運営を行っています。

POPO館長の白田好彦さんによると、区内の学校への広報活動や、中高生のクチコミなどが拡がり、利用者も年々増え、現在、年間のべ約28000人の来館があるそうです。スタッフは、カタリバの常勤職員7名、非常勤スタッフ7名に加え、実際に利用する中高生と距離の近い学生スタッフが8名いて「ナナメの関係」で伴走しています。学校外に中高生の自由で健全な居場所(ハード)と中高生に寄り添う歳の近いスタッフ(ソフト)の存在がPOPOの強み。このモデルが全国各地に広がるのが理想だと感じました。



※ナナメの関係
タテの関係(親や大人)、ヨコの関係(友人)に対し、少し年上の先輩のことを指すカタリバが提唱する言葉。



◆高校生が社会課題の解決に チャレンジする「マイプロジェクト」



井原、矢掛、笠岡、浅口地区を中心に若者と大人の出会いと協働の場づくりを行う団体「備中志事人」が主催となって行った「コノユビトマレ合宿」(2018年6月井原市美星町)では、認定NPO法人カタリバの今村亮氏を迎え、地域や身の回りの課題や気になることをテーマに活動プランを計画し、実行することを通じて学ぶ課題解決型学習「マイプロジェクト」の作り方を学びました。合宿には70名を超える参加者が集まり、中学生や高校生の「マイプロジェクトづくり」を大学生や大人が伴走しました。

備中志事人代表の藤井剛さん(井原市教育委員会)は、「元々小学校の教員でしたが、教育委員会で生涯学習に関わり始めた5年前、地元井原を素材に何かしたい高校生や大人を集めて「Team夢源」というグループを立ち上げました。今では「Team夢源」だけでなく矢掛「K60」や笠岡「笠岡未来クルーズ」なども広域連携をとり、備中地区全体で活動しています。「夢は『志事人ネットワーク』を作ること。備中だけでなく岡山県下全体でつながり、中学生だけでなく、大人も活躍できる場づくりを目指したいですね」と語りました。



『Team夢源』1期生と思い出を語る藤井剛さん



参加者の声

吉武勇太さん(高校生)

この合宿では、自分自身を見つめ、合宿に参加している仲間(大人の方、大学生、中高生)と話し、本音をぶつけ合い、自分にしかできない「マイプロジェクト」をしっかりと構想することが出来ました。出逢いと学びに満ちた2日間だったと強く感じました。イベントとは異なる箱物にすぎませんが、その箱に入る中身(参加者)によって価値が産まれます。このイベントでは「出逢いは『チカラ』』という事を強く感じる事が出来、非常に有意義な2日間でした。



岡崎瑛さん(大学生)
熱い思いをもってキラキラしている中高生、全力で伴走してくれる大人達...あの場には沢山の愛が溢れていました。いっそ消えてしまいたいと思っていた私が今はやりたいことのために走っています。紛れもなく今の私の原点です。

黒瀬大亮さん(教育コーディネーター)
参加者のファシリテートをして感じたこと。人生の時間を平等に記録したものが年齢だとすれば、人生の時間をどれだけ濃厚なものにしたのかが豊かさの違いではないでしょうか。ここに集った人々は、年齢に関係なく濃厚な時間を過ごし、さらなる濃厚な時間を目指しています。人を年齢で決めることなどできません。

三戸祥恵さん(勝央町教育委員会)
勝央町からは、カタリバの中高生4名と共に参加しました。「マイプロ」を探し、形にするため、大人も子どもも本気でぶつかった2日間。若者たちのめまぐるしい成長と未知の可能性に驚くばかりでした。多くの若者と、若者と本気で向き合いたい大人に出会えたことに感謝です。

若者のマイプロに伴走する大人の顔もキラキラしていた一泊二日の合宿でした。この企画、毎年継続して行われることを期待しています。

1980年代



1982年、サラ・マゾ・クニヨシ夫人を訪ねた福武哲彦社長

「アーティストは皆、作品が認められ賞賛される事を願うものです。国吉は、祖国を遠く離れたアメリカにおいて高く評価されたアーティストですが、ここでまた、日本においても評価が高まっている事は、二重にうれしい事です。国吉は、生まれたこの岡山で、もう一度生まれ変わろうとしているのです。」(サラ・マゾ・クニヨシ)

子どもたちが福武コレクションの作品を見ている様子に哲彦さんは何を思ったかな。1986年、福武哲彦さんは亡くなってしまっただけで、会って話してみたかったな……。



1990年代

国吉康雄美術館



福武総一郎 (ベネッセホールディングス名誉顧問)

父が亡くなったあと会社経営を引き継いだ私は、美術品収集も続けました。国吉康雄の作品は見る人に対して、あなたはとう生きるのか？と問いかけてきます。その深い問いかけは、会社経営や、後の直島のプロジェクトに大きな影響を与えました。そして1990年、新しい本社ビルの2階に「国吉康雄美術館」が開館しました。



ここではテーマを決めず展示やアーカイブ資料の研究、レソネ(全作品集)の刊行、ニューズレターの発行などを行なっていたのね。

「新幹線が岡山駅に滑り込む」とする少し手前に、ベネッセコーポレーションがあります。私は、その本社ビルの横に「国吉康雄美術館」という表示を見出し、惹かれるようにタクシーを飛ばしました。……(「バンダナをつけた女」の)たくましさには、私は愛おしさを覚え、なぜなら、彼女は都会をさすうら寂寥の身にありながらも、生の本質を真正面から見すえ、雄々しく生き抜こうとしているからです。伊藤謙介氏(京セラ相談役)。



ベネッセコーポレーションが所蔵していた国吉康雄作品と資料は、2003年、私が購入の上、「福武コレクション」として岡山県に寄託しました。やはり岡山の皆さんに役立ててもらいたいですからね。岡山大学の国吉康雄教育研究講座も、福武コレクションを使った市民イベントや展覧会を企画するなど、がんばっていますよ。



いま、福武コレクションはどうなっているんですか？

参考文献
「福武書店30年史」福武書店1987年
「郷土の生んだ国吉康雄とその時代の画家たち展」図録 福武書店1982年
「国吉康雄と近代ヨーロッパの名画展」図録朝日新聞社1985年
伊藤謙介「永遠の恋人」に魅せられて——国吉康雄「心に吹く風」文源庫2008年
「YASUO KUNIYOSHI ネオ・アメリカンアーティストの軌跡」福武書店1990年

協力
岡山大学国吉記念・美術教育研究と地域創生講座
クニヨシパートナーズ
ベネッセホールディングス

福武コレクション
ものがたり

エピソード2
— 国吉康雄美術館 —

福武哲彦さんが国吉康雄の作品と出会ったのは1970年代だ。方よね。そのあと福武コレクションはどうなったのかな。



1980年代



1980年代の福武書店 本社ラウンジ (当時=岡山市北区高柳)

こんなふうに社内でも展示していただね！社員も見るのができたのかな。



そう、新人の頃会社の中で二人の赤ん坊を見方のをよく覚えています。とても強い印象を受けました。展覧会でこの作品を見ると、当時のことを思い出します。



後藤恵子さん(ベネッセコーポレーション社員)

「美しいものに触れることは、人生を豊かにします。私も福武書店では、人類の財産である芸術作品を子どもたちに伝えてゆくことを大きな使命のひとつと考え、これまで収集を進めてまいりました。」福武哲彦氏

「国吉康雄と近代ヨーロッパの名画展」1985年開催。朝日新聞社主催、下関市立美術館ほか全国8会場を巡回。



「特別展 福武コレクション 国吉康雄」1987年、渋谷区立松涛美術館

1980年代

「郷土の生んだ国吉康雄とその時代の画家たち展」1982年、朝日新聞社主催により天満屋岡山店にて開催され、5日間の会期中に訪れた鑑賞者は1万4000人を超えた。

「福武書店の社業は教育出版が主たるものとなっているが、文字による教育と美術による教育との普遍性は全く共通するものなのである。教育者としての福武氏の理想が、もうひとつの形としての美の世界へと向けられるようになったのは決して不思議なことではなかったといえる。しかしそれは美術への愛情と社会的意義への認識があつてこそはじめて成り立ち得るものなのである。」藤田慎一郎氏 (大原美術館館長)

このころは「福武コレクション」って、福武書店が収集した美術作品全体を指していたのね。国吉だけじゃなくてマチスやシャガールなどの作品もあつたんだって！全国の美術館や百貨店で、福武コレクションを紹介する展覧会がたびたび行われたのね。



オペラプラザ岡山



「プロ・アマ、年齢、ハンディのあるなしに関係なく誰もが輝ける舞台を!」という趣旨のもと、オーケストラ演奏・全幕日本語によるユニヴァーサルデザインオペラを毎年総勢70人以上で上演。出演者はもとより、観客にとってもオペラに親しむ機会を提供し、地域に根付いた文化芸術活動を行うことをめざす。出演者は、5歳~70歳代まで幅広く、全盲のメンバーも盲導犬と共に出演している。公演時には点字パンフレットや字幕を用意している。

設立
2009年4月1日
主な活動場所
岡山市内の公民館等

一般社団法人
日本建築学会中国支部岡山支所
岡山近代建築研究会



県内の近代建築に関する調査研究を行い、その成果について社会一般に講演会やシンポジウム等を通じて、発表・報告を行っている。この度、岡山県内に現存している終戦後の昭和建築に注目し、その建物の時代性、建築意匠の特徴、地域への波及効果など様々な観点から評価し、各建物の重要性について取り纏める活動を進めている。そして、これらの建物がある地域の方や、その他多くの方々に昭和の近現代建築の価値を知ってもらい、保存・活用・継承の可能性について探りたいと考えている。

設立
2006年11月4日
主な活動場所
ノートルダム清心女子大学・岡山県立図書館

地域課題の解決に向け、岡山県の教育と文化による人づくり・地域づくりに取り組む方々を応援する「福武教育文化活動助成」。今年度の助成対象に決定した127団体(個人)の教育文化活動のうち、3ヵ年継続助成に決定した団体の活動をご紹介します。

応援しています!

山陽学園大学
ボランティアサークル
あい
犯罪被害者支援チーム



実際にあった交通事故をもとにデジタル紙芝居を作成。大学生が中学生や高校生や小学校や就学前の子どもたち(幼稚園・保育園・こども園)に日本語版・英語版の読み聞かせを行っています。読み聞かせを行うことにより犯罪に対する心理的な抑制になり、なおかつ社会のリーダーとしての自覚を植え付けることにもつながり、人権に対する意識を高めることで、安心して住みやすい街づくりを目指す活動をしています。

設立
2016年4月17日
主な活動場所
岡山県内の各学校

「岡山の舞台芸術を盛り上げよう!」との志を同じくする現代劇団・ミュージカル劇団・狂言団体・映画制作団体・落語家等が集まり結成した。舞台芸術活動に関するワークショップの開催や機関誌の発行をメインに活動しており、舞台活動に対する敷居を低くすることで、より多くの方が実際に自分でチャレンジし新しい自分を発見してほしいと思い、取り組んでいる。「文化が経済を作る」心意気で、岡山県の発展を目指し活動を続けている。

おかやま演劇サロン



設立
2014年1月1日
主な活動場所
岡山県生涯学習センター・天神山文化プラザ



FACE

RESAS☆温羅カフェ 地域データ分析研究会 代表

川崎 好美さん

助成は「やってみなはれ」の場

5月に岡山市内の奉還町商店街で、地域創生をテーマに「地域のごと シブゴト 温羅カフェ」というイベントが開催されました。参加者は高校生、大学生、学校の先生、企業経営者、国家公務員、NPO代表などバラエティ豊かな顔ぶれ。このイベントを企画した川崎好美さんにお話を伺いました。

―「温羅カフェ」をやるうと思っただけでいいですか？

専門学科の商業と地域創生は、かなり深い関係があると思っています。教科教育に携わる中で、地域に愛着を持ち、地域を支える大人から学ぶことは、多感な時期に進路や将来を考える上で一番響く教材ではないかと考え

ています。学校には学校や教科の目標や計画があり、思い付きでの取り組みは簡単にはできない。いつかやってみようと思っても熱量が持続できないかもしれない。枠にとらわれず、できる道はないかと思ひ、助成申請しました。

―その中「RESAS」を組み込んだのはとてもユニーク
例えば、人口減少、高齢化社会。あの商店街、店が減っているなど日ごろ感じている「雰囲気」や「イメージ」を根拠を持って考えたい。内閣官房まち・ひと・しごと創生本部が提供するオープンデータ「RESAS(地域経済情報分析システム)」など最適で誰でも使えるツールの可能性を感じました。

―地域との活動をはじめたきっかけ
20代の頃、初任の津山商業高校で地域の商店街の月刊商店街通信づくりに挑戦しました。「しごらみや損得のない高校生だからできること」を実感。「やってみなはれ」(サントリー創業者の言葉)ではないですけど、若手なりの発想を任せてくれる場が学校にあったのです。2校目の勝山高校では、のれんの町の店主を訪ねて「聞き書き」を行い、それをまとめたウェブページ「仕事じゃけん」の作成の中で「地域の大人に向き合って学ぶ」ことは多感な時期の生徒に響く言葉や思いが詰まっていることを感じました。平成17年、初めて福武教育文化振興財団の助成をいただきました。条件が整った時に取り組むのではなく、ビジョンや行動力がある時に挑戦できる。助成はそのような「やってみなはれ」だと思っています。

―川崎さんにとって「温羅カフェ」とは？
やっぱり地域のことを自分ごとにする。岡山を愛し「ここに生きる」大人を知り、地域を理解することは、10年、20年後に花咲く、地域創生の種まきだと思います。

川崎好美 / 岡山県立倉敷商業高等学校 教諭(教科:商業)

1977年岡山県津山市生まれ。平成12年～津山商業高校。平成15年～勝山高校 岡山県スクールインターネット博最優秀賞(2004)・県教育長賞(2005)受賞。平成20年～玉野商業高校(現:玉野商工高校)高校生おむすび「玉結び」の企画・販売を手掛けた。今年度より倉敷商業高校勤務。

vol.2

2018.6.24. 岡山県立図書館

andF 教室レポート

あなたの活動伝わってる?
「伝える」「伝わる」を考える



広報メディアの多様化、多機能化、多チャンネル化の進展・
…広報を取り巻く環境はこの10年で大きく変化しています。効果的・効率的に広報するために自分たちに合った「伝える」「伝わる」を考えました。

andF 教室で印象に残った言葉は？



佐藤 豪人
「ブランド化する
コミュニケーションデザイン」
HIDETO SATO DESIGN 代表
デザインストラテジスト/アー
トディレクター/デザイナー



三宅 真人
「うまくいく
WEBとSNSのきほん」
トライマンデザイン代表
WEBデザイナー/プログラマー



山川 隆之
「記録、編集、発信……
実践的広報力の磨き方」
吉備人出版代表/編集者

「デザインで可視化する」

「web、SNS、
紙媒体と複合的に考える」



「リアルなつながり」

「理想のファン像(ペルソナ)を考える」

「活動に共感してくれる人だけを
対象にする(欲張らない)」

「旧来のマスメディアを、
まだまだ活用できる」

「オウンドメディア」

「差別化ではなく本質化を行う」

「デザインしていくうえで、
本質を探っていくことが大事」

「理念やビジョンを明確にする」



人が集まり対話が生まれる場



藤井友視

FUJII Yumi

1984年生まれ、岡山県玉野市出身。岡山県立大学デザイン学部卒業。陶芸の仕事を目指し、石垣島の窯元に勤務後、岐阜県多治見市の陶磁器研究所で学ぶ。器と料理にも興味を持ち、岡山市内に器とごはんのお店を開店。2014年、Jテラスカフェがオープンする時に店長として働き始めた。

Junko Fukutake Terrace

世界的な建築ユニット「SANAA」によって、岡山大学構内に「人が集まり対話が生まれる場所」として設立。
<http://www.jtcafe.jp/>

Junko Fukutake Terrace(以下Jテラスカフェ)では普段、厳選した野菜やお肉、果物、調味料を使ってランチやデザート、ドリンクを作っています。器でも楽しめるようにこだわって選んでいます。また、イベントや夜の貸切も行っていて、それに併せて特別メニューも作ります。

6月には岡山県文化連盟主催のワークショップが開かれました。講師の一人であり、インドになじみの深い矢萩多聞さんのリクエストで、色とりどりのおかずを好きに混ぜて食べるインドのご飯をイメージした、25種の具材のピビンバを作りしました。様々な味・食感・香り・色を楽しめるようなものになるよう考えて作りました。

Jテラスカフェは素敵な建築と広い芝生に囲まれた、とても贅沢な空間です。いろいろと活用したいと思いつつも、自分たちだけでは限界があるので、様々な方にこうして一緒に楽しく使ってもらえることがとても嬉しいです。



Editor's Column

■平成という時代の最後の夏に、西日本豪雨という大きな災害が発生しました。被災された皆様には謹んでお見舞い申し上げます。地球温暖化による世界各地での異常気象が、晴れの国岡山にも容赦なく起こりました。■その後も各地で40度を越える猛暑日が続き、大型台風が毎週のように通過し、日本の気候は本当に変わってしまったと実感する日々です。今までの常識が全く通用しない新しい時代となったと認識しなければならないようです。財団では、被災地支援の緊急助成を実施しましたが、中長期の視点で、教育文化による地域の復興支援をより一層進める必要があると考えています。■9月1日は恒例の助成団体による成果報告会、交流会を開催しました。年に一度の開催ですが、一同に会して、発表をきき、情報交換することで互いに啓発され、新たな交流が生まれる充実した機会となり多くの助成団体の参加がありました。少しでも財団が触媒となって皆様の活動支援が出来ればと思います。これから活動を始めようとする方も、ご遠慮なくいつでもお電話やフェイスブック等でお気軽にご相談下さい。(O)



公益財団法人 福武教育文化振興財団

人づくり、地域づくりを応援します

〒700-0807 岡山県岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3階
TEL:086-221-5254 FAX:086-232-3190
URL:<http://www.fukutake.or.jp/ec/>
E-MAIL: eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 不易 FUEKI vol.67 2018.9.25

編集・発行:

公益財団法人福武教育文化振興財団

制作:株式会社吉備人

デザイン・イラスト:タケシマレイコ

印刷:株式会社三門印刷所